

けが 気枯れ社会の実感宗教

西山 茂

はじめに

新新宗教という言葉は私が作ったとの紹介がありました。が、一九七九年の七月ぐらいに、『歴史公論』という雑誌の中に私が小さな論文を書かせて頂き、その中で使ったのが初めてです。どういうわけか、その後流行語になってしまい、それ以後、私の主たる研究ではないのですが、あちこちでお話をさせて頂いたり、ものを書かせて頂いたりという機会が多くなっていました。しかし、本来、私は宗教運動の研究が専門です。とりわけ、

在家仏教運動と言いますか、創価学会や立正佼成会、本門佛立講、そうした教団には法華系がわりと多いのですが、そうした運動を取り扱う在家仏教運動論をメインのテーマにしています。新新宗教という言葉を作ったために、現代宗教論のようなことをかなり扱わざるを得なくなって、今日に至っております。

新新宗教と言いますと、つい最近の新しい宗教ということになりますが、霊術系の新宗教と言い換えますと、これは大正期にもかなりはやっています。わりと知られたところでは大本教なども、大正期には鎮魂帰神法など

という霊術を使って、だいたい世間を騒がせました。そういう意味では、日本近現代史の中で今日は、二度目の霊術系新宗教のブームということです。日本の近現代史を通覧すると、政府が国策としての近代化を強調して、それを達成したところに、どういうわけか、霊術系新宗教のブームが起るという不思議な現象が見られます。

明治を迎え、ヨーロッパ文明を受け入れ、富国強兵、殖産興業を目指し、国が必死になってアメリカやヨーロッパに追い付こうと努力してきました。その結果、明治二十年のころから三十年のころにかけ、日清戦争や日露戦争が起りますが、特に日露戦争では、とてもかなわないと思われていた白人の国家を打ち破り、これだ、ようやく日本の国家は先進諸国の仲間入りと言いますか、欧米列強の仲間入りができたということで大変喜びました。

そのようにして喜んで、しばらくたったら(大正期になつてからですが) 神秘とか呪術という不思議なものがブームになり、それを追い風に、そのような色彩をもった新しい宗教が伸びてくるということがありました。戦

後も、新規巻き直しの国策としての近代化が始まりました。この時には、もう富国強兵はありません。あつてもせいぜい自衛隊ということ。戦後は平和憲法のもとで経済発展だけに力を入れていこうと、戦後復興、それから経済発展、とりわけ高度経済成長ということ。これもまた、世界が驚くほどの大発展を遂げました。明治期の近代化を第一の近代化とすれば、これは第二の近代化に当たりますが、それが一段落したのが一九七三年の第一次石油危機の時です。その直後、今度はユリゲラーのスプーン曲げをきっかけとして、不思議なこと、神秘なこと、オカルト的なものが大変なブームになり、その追い風のもとに新しい新宗教、これが新新宗教ですが、伸びてきたということです。ですから、私たち日本人は、近現代の宗教史の中で霊術系の新宗教のブームを二度ほど経験しているのです。

今回の場合は、かなり長続きしています。一九七〇年代の初頭以降、いわゆる新新宗教が台頭してきましたが、それをあえて第一次の新新宗教と言いますと、一九九〇年前後から台頭してきたものは第二次の新新宗教という

ことになります。これは、ご承知の通り、最近、世間を騒がせておりますオウム真理教、それから幸福の科学などです。幸福の科学は、ご承知の通り、第一次の新しい宗教の中に入るGLAの影響をかなり強く受けています。それからオウム真理教は、麻原彰晃教祖が阿含宗に所属していたことから、阿含宗の影響が見られます。ですから、第二次の新しい宗教は、第一次の新しい宗教の影響のもとに出てきたということです。とは言え、微妙に両者は違います。その辺りのことは、後で説明したいとおっております。

はじめに、最近の日本社会の空気と言いますか、雰囲気^{けいふ}に注目して社会を規定しようと思いますと、「^{けい}枯れ社会^が」ということが言えるのではないかと思います。気^け枯^がれの「^け気^が」は、片仮名の「^けケ^が」です。日本民俗学では、ハレとかケとかケガレという片仮名で書きます。桜井徳太郎先生は、これに元気の^け字を当てて、生命エネルギーととらえています。ですから、生命エネルギーの満ちた状態を^け気^がというわけです。それがどんどん減っていつて、エンブティになると言いますが、潤いがなくな

一、「世俗化」のレベルと起源

では一体、世俗化とは何だろうかということがすぐに疑問になります。カレル・ドベラーレという宗教社会学者は世俗化を三つのレベルに分けています。これは非常に分かりやすいので、今日はこれを紹介したいと思います。

一つは社会の世俗化ということです。世の中が世俗化するということです。例えばヨーロッパの中世キリスト教世界を考えると、カトリック一色の世界です。多少は異教的なものは残っていたかもしれませんが、カトリックが一枚岩的に意味付けを与えていた社会です。言ってみればキリスト教が広宣流布されているような社会です。こういう社会は世俗化されているとは言いません。

ところが、歴史が近代に近づくにしたがって、キリスト教会が分裂してきます。ナショナルイズムの勃興と関係するのですが、プロテスタント教会が出現してきます。それぞれの国が独自のプロテスタント教会をつくってしまします。イギリスは英国国教会をつくり、ドイツはド

ってカサカサになってくることを^け枯れた状態^がと言うのです。生命エネルギーがなくなっている、みずみずしさがなくなっている、言ってみれば生命が躍動していない状態^がということが言えると思います。

それが「^け枯れ社会^が」ということなのですが、どうしてこのような状態になってきたのだろうかということ、まず問題になります。私は、それは社会や人間の世俗化というものと関係していると思います。世俗化のことを英語でセキュラリゼーション^(Secularization)と言いますが、それは別に日本だけではなく、いや、日本以上にヨーロッパ、アメリカなどの方が、より縁が深い言葉ではないか、と私は思っています。なぜなら、従来、キリスト教との関係で世俗化という言葉が使われてきたからです。欧米の宗教社会学者は、世俗化のルーツはキリスト教の中にあるということをよく言います。ユダヤ—キリスト教の伝統の中から世俗化が出てきたと、よく言われるわけです。

イツでルター派が強くなってきます。そういうようにキリスト教世界が割れてきます。そのようになって、社会の各領域へのキリスト教の影響が大きかった時はいいのですが、産業革命以後、経済が発展してくると、経済の領域が宗教の影響を受けない形でどんどん大きくなってくるわけです。

政治の領域にしても同様です。フランス革命後のフランスでは、学校へのカトリックの影響力を排除して、公教育は無宗教でやるという風潮が強くなりました。こうして、教育の世界でも政治の世界でも、経済の世界でも、宗教の影響力が排除されるようになりました。要するに宗教の影響がなくても、それぞれ自律的に動き得る世俗のセクター、世俗の領域が大きくなってくるわけです。そのうちに、世俗の領域の方が中心になってしまつて、宗教には社会のある小さなセクターが充てがわれ、その中で自由にやってくださいということになります。日本で言うならば、この領域は宗教法人法に従って運営してくださいという形で、宗教の出る幕が限られてしまうわけです。社会の他の領域は宗教と関係ないということ

になってしまいます。このように、宗教的な意味付けが
いらぬ社会の領域が広まっていくことが、ここで言う
社会の世俗化という内容であるわけです。

とにかく、こうして社会の主要セクターの宗教的な意
味が抜き取られていくようになります。宗教的な意味付
けがなくなると、何が起こつてもみんな偶然になつてし
まいます。あるいは、すべてのことが科学で説明できる
ことになつてしまいます。宗教的な意味付けがあつて初
めて、世の中はしつとりと意味付けられるところがある
と思いますが、それがなくなりますから、社会が気枯れ
てきます。

二つ目には宗教自体の世俗化があります。社会の主要
セクターの意味抜きが進んで、宗教よりも科学技術の方
がもっと大切だということになってきますと、そうした
風潮に合わせて宗教が変わってきます。昔の教えの説き
方とちよつと違つた形で教えを説かざるを得ない事態に
なるとか、神学のレベルで自由主義神学が出てくるなど
というのも、ある意味では宗教自体の世俗化と言えます。
福音書に書かれているいろいろな奇蹟物語などにして

も、そのままとらなくてもいいということになってきま
す。こうしたことが、宗教自体の世俗化に当たります。

それから三つ目には、個人の世俗化です。人間の意識
と行動の脱宗教化と言いますが、宗教に個人がかかわつ
ていく度合いが減つてくるということです。いづれにし
ても、各レベルの世俗化が進むということが、「気枯れ
社会」になることと大いに関係があると私は思います。

さて、この世俗化がどのようにして起こつてきたのか、
何がその起源なのかを考える場合、大体これも三つぐら
い答えがあるようです。時代の古いところから言います
と、一つには古代以来のユダヤ・キリスト教の歴史とい
うことがよく言われます。宗教社会学者のピーター・
バーガーなどは、ユダヤ・キリスト教の歴史は自ら墓穴
を掘つた歴史だと、言っています。一神教ですから、創
造主としての神と被造物としての世界を分けるわけデ
す。そして、造られた世界の方は、神聖性をあまりもた
ない。それでも、カトリックの場合は、天使とか、守護
聖人とか、聖母マリアとか、いろいろなものを認めます
から、まるつきり被造物の世界に神聖性がないというわ

けではありません。それでも、他の宗教と比べると、例
えば、いくつもの神様を拝んだりということはありませ
ん。法華経の伝統には謗法嚴禁ということがありますが、
一神教にもそのような考え方があります。十戒のなかに
「汝われの他に何物をも神とするなかれ」という戒めが
あります。創造主たる神と同じように尊いものは何一つ
ない、偶像を拝んではならないということです。カトリ
ックを含めてキリスト教はなかなかうるさい宗教なので
すが、特にプロテスタントの教会がそうです。

プロテスタントの教会には聖母マリアや守護聖人の信
仰がありません。そうすると、被造物の世界には何一つ
神聖性がないということになります。世界をきれいに掃
除してしまいました。これに対し、日本の社会は全く掃
除されていません。ですから、日本人は何でも神と拝むわ
けです。八百万の神と言いますから、何でも神として拝ん
でしまうところがあります。そうした点では西洋と全然
違うのです。西洋は一回、キリスト教というローラーを
かけてありますから、異教的伝統が排除されているので
す。尊いのは神一人で、それと並ぶべき存在は何一つな

くなりません。ですから、近代になって、だんだん世俗的
な考え方が強まってくると、あとは倒すべきものはたつ
た一つ、神だけを殺せばよくなります。しかし、一神教
の神はそびえ立つ神で、大変強い神ですから、これを殺
すのは大変なのです。神殺しの哲学的な営みは大変なの
です。ですから、そのような一神を殺す中から包括的な
哲学というものが生まれてくるわけです。

日本には、そうした神との格闘を経験して出てきた無
神論はありませんから、日本の無神論は鍛えられ方が弱
いと言えます。西洋には一神と本当に格闘して神なき哲
学をつくつていった伝統があります。いづれにしても、
そういう形で神が倒れる。あとは神聖なものとはなくな
るのです。たとえ神は倒せなくても、もともと被造物の世
界には神聖なものはあまりないのですから、被造物の世
界に人間が簡単にタッチ可能になるのです。要するに、
人間が自然に手を加えて、それを生産の原料にしたりす
ることが容易にできるようになるわけです。

ところが、タイなどには精霊がすべてのものに宿つて
いるというピー信仰があります。日本でも、岩や木など

にしめ縄を張ったりします。あれは神聖性を象徴しているわけです。私の住んでいる埼玉県には武甲山という山があります。武甲山は石灰の山ですが、昔は山の上に神様が祀ってあったのです。でも今では石灰を取るためにダイナマイトをかけて、山を崩してしまっています。武甲山は今では崩れて形が変わってしまっています。山が商売の対象になって開発されてしまいました。山というものを格別には神聖なものと思えなくなると、人間の操作可能性が高まるわけです。その結果、経済が発展するということはあるかもしれませんが、今度は、自然破壊をもたらすということになりかねません。

そうした道ぞなえをしたのはキリスト教だという考え方があります。そして、最後には神までが殺されることになります。そこで、ピーター・バーガーは、キリスト教は自らの墓穴を掘ったというのです。アメリカでは教会出席率がかなり高いのですが、ヨーロッパでは本当に駄目です。私もフランスの農村に行つてカトリックの教会をのぞいたのですが、ミサの参加者が本当に少なかったのです。しかも、参加者は高齢者だけです。どこでも

次第にそうなつてきています。しかし、素晴らしい近代社会を生み落としてくれたのは、やはり、ヨーロッパにキリスト教があったからかもしれません。とにかく、キリスト教は、世俗化の一つの原因と考えられています。

もう一つの世俗化の原因と考えられているものは、近代における共同体の崩壊と結社社会化です。ブライアン・ウィルソンという宗教社会学者は、これをソシエタライゼーション (Socialization) と言っています。日本で共同体と言うと、ムラやイエです。ムラが崩れると、ムラと相即不離の關係にあったムラの鎮守としての神社も力を失います。共同体が崩れるのですから仕方がないと言えましょう。イエ共同体が崩れても、伝統的な形でイエと不二の關係にあった神棚や仏壇 (位牌檀) への信仰が力を失います。

その代わりに今度は、都市の中で共同体から自由になつた人々が、個人信仰の観点から立正佼成会に入会したり、創価学会に入会したりするようになるわけです。しかし、彼らが個人信仰をもたない場合には、当然、無宗教になつてしまいます。共同体が壊れると、やはり世俗

化が起こるということがあるわけです。

三つ目の要因は、もっと新しい時代のもので、これが自体が世俗化の現象であると言つてもいいのですが、それは、現代における生活現象の私事化です。これは私生活化と訳してもいいのですが、英語では、プライヴァタイズーション (Privatization) と言います。今日でも、経済や政治という社会の大きなセクターは私事化しませんが、宗教などは完全に私事化していると言えます。アズ・ユー・ライクの宗教と言いますが、全くのお好みの宗教、ちょうどスーパーマーケットに買い物に行つて、気に入ったものを買ってくる、そうした対象になつていくということです。自分だけの好みのものだから、私事化した宗教には社会性がありません。

宗教社会学者のトーマス・ルックマンは、宗教が制度から離れていつて個人化してくると、見えない宗教になると言っています。宗教が個人の内心の現象になるということです。井門富二夫先生は、これを個人宗教と言っています。私はこれを自分教と言っています。自分の心の中の宗教という意味です。宗教の日曜大工と言いま

すか、宗教のドウ・イット・ユアセルフ (D・I・Y) と言いますか、そんな感じのものです。

別の形で整理してみますと、宗教が脱制度化してくる。制度から宗教がどんどん離れていく。初めは共同体と密接不可分の制度宗教であつたものが、都市化の中で共同体が壊れ、今度は、都市の中に集まつてきた人々が、そこにある新宗教、制度ではない新しい宗教に群がってくる、これが組織宗教です。

けれども、組織宗教と言つた場合、それはある意味では組織の縛りがかなりきついと言いますか、非常に団結していて、人々がその中に安心を見出すという要素があつたのですが、それが成熟した資本主義社会になつてきますと、また変わってきます。それは、豊かさを満喫した若い人たちが組織に縛られるのを嫌いになつてくるからでもあります。人々の意識と行動が個人主義化してきますから、あまりうるさく組織で縛ると、嫌がつて逃げようとしています。そうした段階に合わせた形で出てくるのがネットワーク宗教です。これは、ほぼ新新宗教に当たると思います。

しかし、これも嫌だという人もいます。全く自分一人の宗教、宗教の日曜大工によって、自分だけに通ずる個人的な意味の体系としての宗教を作ろうとする人々が出現してきます。ピーター・バーガーは、社会や個人に究極的な意味付けを与えて、人間や社会をカオスの恐怖から守ってくれるものを「聖なる天蓋」と言いました。その「聖なる天蓋」が、社会全体を覆っているものから始まって、だんだん小さくなって、ネットワークの上しか覆わなくなり、最後は自分の頭の上しか覆わなくなるといふことです。この流れ自体が世俗化の流れというように言うこともできるでしょう。そして、そうした流れの一つの帰結として、「気枯れ社会」といふことが言えるのではなからうかと思えます。

二、宗教の「豊かさ」と「貧しさ」

次に、そうした「気枯れ社会」における実感宗教の話をしなければいけないのですが、その前に、そこに至る伏線として、宗教における豊かさとか貧しさの問題を考えてみたいと思います。宗教には豊かさも貧しさもない

ではないか、豊かさや貧しさは経済の問題だと言う方もあるかもしれませんが、少しお待ち下さい。

私は宗教の原点は、言語化以前の驚きの体験だと思えます。ルドルフ・オットーという有名な宗教学者が、ヌミノーズ (Numinose) ということを言いましたが、これは、畏怖と魅惑の入り交じった驚くべきもののことです。つまりヌミノーズは、逃げようと思えないような怖さと同時に、にじり寄っても見たいというような魅力もあるものなのです。そうした両義性をもっているものが言語化以前の驚きの体験であるということです。不思議な体験をする、そういうものと出会うということです。

ですから、これは本居宣長の言う日本のカミの概念に近似しているとも言えます。カミというのは漢字の神や一神教の GOD とは違います。本居宣長は、古事記伝の中で「何にまれ、尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物」がカミだと言っています。何にまれ、つまり何でもよいというわけです。何でもよいと言うのは神的なものでもよいし、悪魔的なものでもよい、どちらでも

いいということです。極端な話ではキツネ、タヌキの類

でもいいというわけです。とにかく、世の常ならぬといふことが大切だということです。すぐれたることといふのですから、とにかく普通でない、特別なことという意味です。可畏き物といふのは、恐れを感じさせるものです。その場合の恐れには、ルドルフ・オットーの、逃げ出したいほど怖くて、同時に限り無く近づきたいものという含意があります。もともと、日本のカミは、こうしたものであるというわけです。

こうしたカミは、例えば、日本の民俗宗教や新宗教の鮮やかな現世利益の中に顕現していると考えることができま。鮮やかな現世利益を頂く、あるいは功徳を頂く、お蔭を頂く、日本人は、そこにカミの顕現を見えるということです。これは日本宗教の原点であると私は思います。これは妙法曼陀羅を拝む日蓮系の新宗教でも同じことだと思えます。どう見ても直らないと言われていた病気が直った、これは明らかに驚きの体験です。そうした驚きの体験をすると、信心が堅固になると言われています。現世利益の体験がいかげんだと信心が続かなくなると

いうこともあるかもしれません。鮮やかな現世利益体験の中でカミと出会うということは、日本宗教の伝統であり原点であると私は思います。そうした体験が後でいろいろと言語化されてくるのです。

さて、カトリックとプロテスタントの場合、どちらが豊かでどちらが貧しいのでしょうか。これは言わずと知れたことだと私は思います。ピーター・バーガーは、「カトリック世界の〈豊満さ〉と比べるならば、プロテスタンティズムは、宗教的内容の膨大な富を犠牲にしての徹底した省略、〈精髓〉への還元のように思われる」と言っています。プロテスタント教会は、合理主義を求めるあまり、結果として貧しくなっていました。彼らの教会の中を覗いてみれば分かりますが、前方中央に説教壇があるだけです。前方の壁に十字架はあるかもしれませんが、それだけです。いかにも殺風景です。ところが、カトリックの教会を覗いてみるとそんなことはありません。聖母マリアの像もあれば、守護聖人の像もあります。キリストの十字架もプロテスタント教会と違って生々しいです。槍で刺されたあとから鮮血が流れ出て

いる像が、そのまま飾られています。日本人の趣味には合いませんが、とにかく、リアリティーがあります。

カトリック教会は、儀礼も非常に大切にします。カトリックの信者は儀礼の中でしつとりと宗教的な感情に潤うことができるのですが、プロテスタントの教会は聖書を学ぶ学校のようなものですから、感情的な潤いは望めません。ですから、ふくよかさ、豊満さは、プロテスタントイイズムの場合にはあまり感じられません。

ピーター・バーガーは、プロテスタンティズムは神聖性の三要素としての神秘、奇蹟、呪術から可能な限り脱却したと言っていますが、確かにそういうことが言えます。そこから脱却するのは結構ですが、その結果、キリスト教は自らの墓穴を掘った宗教になったとバーガーは言います。こうしてプロテスタンティズムは、「人間の聖なるものへの繋がりを狭めてしまい、ついには神の言葉と呼ぶ狭い回路だけにしてしまった」というわけです。神の言葉というのはバイブルの言葉です。教会の集まりが聖書の勉強会みたいになってしまったということです。

のことです。それに対して、「多少のことは」と言って習俗信仰を包摂してくれる立場は、豊満なカトリックの立場、つまりCの立場です。更に、Fというのは、ファンダメンタリズムの立場です。これは徹底して偶像崇拜だ、謗法だ、と言うウルトラPの教条主義です。宗教にはPとCとFの立場があるというわけです。この観点から見ると、日本の宗教の多くは極限のCと言えるかもしれません。それと比べると、カトリックも日本では一神教を代表して、相対的なP役割を果たさざるを得ないということになります。さすがのカトリックも、日本の宗教にはC度の点で劣るということになります。

日本宗教の内部では、相対的にPの伝統が強いのは、念仏と法華です。念仏の中では、とりわけ浄土真宗がPです。法華も同様です。法華の中では、とりわけ日蓮正宗がP（F?）です。これに対して、真言宗などは限り無くCです。何でも拝んでご利益を頂くといいところがありますので、豊かと言えは確かに豊かと言えます。もともと、そのような形で簡単には決め付けることができない多様さも日本の宗教界にはあります。

次に、ふくよかなカトリックと、日本の宗教を比べた場合にはどうなるのでしょうか。言うまでもなく、これは日本の宗教の方がよほどふくよかです。何しろ、八百万の神様がいて、どのような拝み方をしてもいい。タブーがなく、何をやってもいいというのですから、ふくよかさの極みです。これは、カトリックよりもふくよかです。ですから、遠藤周作が『沈黙』という本の中で日本の宗教風土のことを「泥沼」と言っています。一神教の立場や純粹な法華信仰の立場から見ると、日本人の一般的な宗教感覚は、あまりにもケジメがなさすぎると映るのではないのでしょうか。偶像崇拜や謗法行為を何とも思わない風潮が一般的なのですから、無理がないのかもしれない。そのような宗教風土が日本には確かにあるので

す。

私と一緒に本を書いた大阪大学の大村英昭教授は浄土真宗の僧侶でもあります。彼は習俗信仰を包摂している程度によって教団宗教をPとCとFに分けています。Pというのは習俗信仰に厳しいビュリタニズムの立場と解釈して下さい。合理性とか純粹だけを求める立場

三、戦後新宗教の変容過程

これから、新宗教の話に移らせて頂きます。新宗教にも本場に幅があり、いろいろな宗教があります。それが時代によってまた特徴を次々と変えていきますから、話がややこしくなります。そこで、以下、戦後に限って、日本の新宗教の変容過程と、その歴史社会的な背景を見てみたいと思います。当然、狙いは、現代日本が「実感宗教」の時代であるということとを照射するところにあります。

今年（一九七三年）は戦後五十年ということで、今、私は戦後の日本の新宗教史を総括する論文を執筆したところ（第四期までの四段階に区分してみました）です。

第一期は戦後復興期、これは一九四五年から一九五六年までに当たり、この時期に人々が新宗教へと赴いた主たる動機を規定したものは窮乏と急性のアノミー（規範喪失）です。

第二期は経済発展期で、一九五六年から一九七三年ま

でに当たります。そこでは「根こぎ」と相対的不遇意識が主な背景になって人々が新宗教に入信しました。

植物を移植する時に普通は回りの土を合わせて持つていくのですが、荒々しく抜いてしまうことを「根こぎ」と言います。無造作に抜いてしまうと移植先に持つて行ってもなかなか移植できないのです。別の土に馴染むまでに植物が苦勞するわけです。それと同様に伝統的にムラ社会の中で生きていた人が、高度経済成長下の「民族大移動」で東京や大阪にやって来た人々が都市社会の中にすぐに根付かないわけです。あたかも「根こぎ」されたような状態になります。そういう場合には、比較的近い土、適応できるような土を持つて来ないといけないのですが、その働きをしたのが実は新宗教でした。創価学会も、そうした働きを果たしたと思います。「根こぎ」された人々を適応しやすくしてあげるのです。都市砂漠の中で孤独をかこっている人に座談会に来ませんかと誘ってあげる、そこで友達ができるということも「根こぎ」の解決に役に立ったと思います。

高度経済成長の時期は、日本人の生活レベルが全体と

して底上げされた時期です。全体的に底上げされましたが、そこには比較的潤ったところと、比較的潤わなかったところがありました。比較的潤ったところと言いますと、例えば、総評や同盟のようなビッグビジネス・ユニオン、あるいは大企業や官庁などがありますが、そうしたところの労働者やサラリーマンは労働組合やそれと一緒にになった革新政党が守ってくれるということがありました。しかし、中小零細企業に働く人々や中小企業主、あるいはその家族たちの中には、そうした恩恵にあずかれなかった人もいたわけです。当然、彼らは、何とかしてくれという気持ちになります。不安も出てきます。これが相対的不遇意識を形成します。こういう人たちの生活の状況の改善にも、いろいろな意味で新宗教は役に立ったと私は思っています。

第三期は繁栄享受期で、これは一九七三年から一九八九年までに当たります。この時期は高度経済成長後の「豊かな社会」に該当しています。高度経済成長による成果を満喫できる、あるいは大きくなったパイを皆で分けて味わえる時期です。しかし、豊かにはなったが、社会も

人間も次第に気枯れてくると思いますか、しつとり感がなくなってくるという時代でもあります。ですから、「豊かな社会の新たな貧困」の時代と言ってもいいと思うのです。この時代になりますと、食べられないで死ぬという人はあまりいなくなるのですが、生き生きと生きられないという新たな貧困がクローズアップされてきます。パンの問題ではなく心の問題と言いますか、とにかく生き生きと生きられない、生命感が躍動しないということが新たに問題になるわけです。

この時期には、気枯れとともに閉塞が問題になります。世の中が安定してしまいますから、並みのことでは成功や出世がおぼつかなくなります。すると、自分の努力を抜きにして、短絡的に成功できるうまい方法はないかという風潮が強まります。そして、そういう人々に標準を当てた新宗教や宗教もどきのセミナーや出版物が、この時期にはかなり出てくるのです。

例えば、法の華三法行という新宗教があります。これは福永法源という人を教祖にもつ教団なのですが、彼は『君は億万長者になりたくはないか』などという本を出

版しています。そこでは、「頭をもぎとれ」というスローガンのもとで独自のセミナーと街頭修行が行われています。これらを受ければ必ず未来が開かれるというわけです。具体的に言いますと、法の華三法行では、若者たちを「ただいま特訓中」というゼッケンをつけた姿で東京の繁華街を歩かせるといふ修行をやらせています。そこに集まる若者たちは、やはりツキを呼ぶ変身の術を求めているのではないのでしょうか。これが第三期です。

第四期はポスト冷戦期で、一九八九年から一九九五年までに当たり、不測・不安と終末感が人々の新宗教への入信を誘った時期に当たります。ベルリンの壁が崩れた後、東西冷戦が終わったのはいいことでしたが、世界各地で民族紛争が起こるなど、さまざまな混乱が見られます。今までは、包括的なイデオロギーとしてマルクス主義が若者たちを相対的に意味付けていたのですが、最近では若者たちの信用を失っているようです。そうした時代の中で誰もが時代の先を読めない、それが終末観ならぬ終末感に結び付くということもあります。これは、言わずと知れたオウム真理教のハルマゲドンなどにつなが

る流れです。

(一) 戦後復興期の新宗教

では、第一期から詳しく見てみたいと思います。この時期は戦後復興期ですが、政治的には天皇制国家が解体され、新憲法のもとで民主主義的な再出発を遂げた時期です。そして、対外的には日本が独立して国連に加盟するまでの時期、経済的には敗戦直後の絶対的窮乏期から朝鮮戦争の特需に始まる復興期、宗教的には国家神道が廃止され、政教分離と信教の自由の原則のもとに新宗教が既成宗教と同様に初めて市民権を認められた時期にも当たります。戦時中に獄に入れられた宗教指導者もたくさん釈放されて出てきました。また、雨後の筍のように、と言われたように新宗教が乱立した時期でもあります。神々のラッシュアワーとも言われました。

では、この時期の新宗教は、どのような人々の悩みごとに対応したのでしょうか。この時代の人々は、「のっぴきならない悩みごと」を解決しようとして新宗教に入信しました。食べていくのもやつの時代ですから、人々

にしたものではありません。

私はいつも言うのですが、既成宗教の方々はみんなきれいなことばかりを言います。例えば、カトリックの修道女がテレビの宗教の時間に出てきて、心の話をします。心、心と、心の話しかしません。しかし、心だけでは生活はできません。既成宗教では心ばかり書いて現世利益を説きません。心もいいのですが、心を説くだけでは足りません。

日本の新宗教は、すべて丸ごとの救済を約束するので。心と体、精神と物質、主体と客体（環境世界、これらを分けて丸ごと考え、全体としての救済を説くわけです。法華仏教にも色心不二とか、依正不二とか、いろいろな言葉がありますが、とにかく新宗教では両者を分けないのです。宗教は心の問題でもあるのですが、それは必ず身体や環境に跳ね返ってくるものです。そこで、新宗教では二つを分けないわけです。これが新宗教の丸ごとの救済ということなのです。ですから私は、新宗教は現世利益を説くと言うよりも、丸ごとの救済を説いていると言った方が適切ではないかいつも言っています。

は大変な悩みごとをもっていました。病院も整っていませんので、病気で苦しみまし、貧乏でも苦しみまし。そうしますと、争いごと、つまり喧嘩もするようになります。貧・病・争の三拍子が揃ってしまうわけです。そのような「のっぴきならない悩みごと」が、人々を新宗教へ走らせました。また、天皇制が音を立てて崩れましたから、それに変わるような「大きな物語」としての宗教的な信念が求められました。それによって急性アノミーを克服しようとしたわけです。このころの新宗教はそうした課題に応えたわけです。とは言え、現世利益が一番目立った時期はこの第一期です。

私が現世利益と言う場合には、決して悪い意味では使っていません。この時期に伸びた新宗教に、天照皇大神宮教、俗に踊る宗教というものがあります。その教団の北村サヨ教祖が面白いことを言っています。どのようなことかと言いますと、病氣直ししかできない宗教はつまらない、しかし病氣直し一つできない宗教はもっとつまらない、ということ。確かにそうかもしれません。人々がそこでカミと出会うのですから、病氣直しも馬鹿

す。

(二) 経済発展期の新宗教

次に第二期、つまり経済発展期の新宗教について詳しく見てみたいと思います。この時期は、日本経済が順調に発展し、やがて世界的に注目される高度経済成長を遂げ、それが第一次石油危機で終焉するまでの時期です。政治的には日米安保条約の第一次、第二次の改定を経て、沖縄返還、日中国交回復へと続いた時期です。終戦直後に神々のラッシュアワーとか、雨後の筍のようにとか言われたようにたくさんさんの新宗教が台頭しましたが、この段階ではそれらが自然淘汰される段階です。つぶれるもの、発展が止まるもの、もっと伸びるものとに分かれるわけです。もっと伸びるものの中では、とりわけ創価学会と立正佼成会が大きく伸びて新宗教の両横綱になりました。

この時期で重要なことは、やはり急激な経済発展に伴う日本列島の全般的都市化現象に対応して起こった様々な問題に新宗教が応えたということです。先ほど言いま

した「根こぎ」と相対的不遇意識ということです。創価学会が公明政治連盟、あるいは公明党というものを分身しながら教勢を著しく伸ばしたということも、相対的不遇意識との関連で分析されなければならないのではないかと私は思います。

では、この時期の経済発展を支えたものは何であったのでしょうか。一つはテクノロジーです。これは外面的な合理主義と言い換えてもいいのですが、これがなければ経済発展は不可能であったでしょう。しかし、経済発展は人間が可能にするものです。つまり、経済発展に適合的な人間がそこにいなければいけません。一生懸命に生産に励む、禁欲して勤勉に生産に励む、そのような合理的な克己勤勉主義、ガンバリズムがなければ、経済発展は不可能です。ここでは、それを内面的合理主義と言っておきます。

こうした一種の合理的なエートスによって、日本の高度経済成長は支えられていたのではないかと私は考えているのですが、そのために第二期になると新宗教の方にも社会から合理化圧力が加えられるようになります。と

りわけ大きく発展した新宗教に対して合理化圧力が強く働きました。具体的には、創価学会とか立正佼成会に対して特に強く働きました。立正佼成会の場合、一九五六年の前半に「読売事件」に遭遇して、四十回にわたって毎日のように読売新聞紙上で邪教攻撃をされました。信心が病気が直ると説いているのが問題である、そんな立正佼成会はインチキ宗教だと徹底的に叩かれました。しかし、それに耐える過程で、立正佼成会は一九五八年に「真実顕現」を宣言するのですが、以後、彼らは教義を整備し、現在のような比較的スマートな教団へと脱皮していったのです。

立正佼成会ならずとも同様でした。例えば、創価学会もやはりこのころから次第にスマートになってきます。以前に言っていたような極端なことはあまり言わなくなり、会員に対しても社会性を重んじなさいと指導するようになってくるわけです。

しかし、大規模化した新宗教が変容した原因は必ずしも社会からの合理化圧力だけによるものではないと思います。このころになると国民の暮らし向きも落ち着いて

きました。すると人々が新宗教に求めるものも変わってきます。以前までは徹底した現世利益を求めていましたが、そうでなくなります。それ以上に人々が精神的、生きがい模索的なものを求めるようになったということです。大規模化した新宗教は、それを取り入れながら、信者の帰属階層を次第にレベルアップしていくわけです。

昔の創価学会は病人と貧乏人の集まりだったと創価学会の幹部自身が語っていますが、それが今は変わってきています。高度経済成長が国民の豊かさの全般的底上げを果たしたことも事実ですが、新宗教信者の帰属階層が上昇した背景には、もう一つ、新宗教が人々の宗教ニーズの変化に対応して呪術色などを薄めてスマートになったということもあったように思います。

欧米のキリスト教の人たちは、宗教と呪術をはっきりと分け、呪術を排斥し、呪術性のない純粹な宗教を構想するのですが、この時期の大規模化した新宗教は欧米流の宗教に一步近づいたとも言えます。それは欧米人からは拍手をもって迎えられたかもしれませんが、宗教のふくよかさとか、原初的エネルギーという観点から言いま

すと問題がなかったとは言えません。新宗教は、なり振りがかわらない時期が一番伸びる時期なのです。それがスマートになり、なり振りがまってくるようになると教勢の伸びが止まってしまいます。なり振りがかわらない姿には凄みがあります。それは一つの原初的エネルギーであると言えます。

しかし、大規模化した新宗教は、もはや、昔には戻れません。ジャンボジェット機になったものがアクロバット飛行をすることはできません。立正佼成会も創価学会もそうですが、どこでも同様です。新宗教が一定程度落ち着いてスマートになったら、逆戻りはできないのです。これは良かれ悪しかれ仕方ないことです。そして、これは新宗教の既成化を意味しています。私は新新宗教という用語とともに旧新宗教という用語も作りましたが、既成化した新宗教は旧新宗教であると言えます。立正佼成会も創価学会も、私から見れば、もはや旧新宗教なのです。新宗教の老舗になったということでもあります。

(三) 繁栄享受期の新宗教

第三期は、繁栄享受期です。この時期は、経済的には高度経済成長後の豊かな社会のど真ん中に当たります。政治的にはロッキード事件とリクルート事件以外には起伏のない時期です。宗教的には成熟した新宗教が海外支援活動や平和運動に乗り出した時期です。創価学会も立正佼成会もNGO活動に力をいれました。当然、社会的な評価は高まるわけですが、やはり問題がないわけではありません。それは、大規模化した新宗教が行う世界規模のNGO活動と末端の新宗教信者のニーズとの間に距離ができるという問題です。新宗教は、いつも足元を忘れないことが大切ではないでしょうか。とは言え、この時期はやはり新宗教が世界に乗り出す時期です。

他方で、この時期には、様々な新宗教がらみの事件がマスコミを賑わしました。イエスの方舟事件とか、真理の友教会集団焼身自殺事件とか、霊感商法事件などが起きた時期でもあるのです。また、人々の悩みごととの関連で言いますと、「豊かな社会の新たな貧困」、具体的には^{けが}気枯れと閉塞がクローズ・アップされてきます。^{けが}気枯

れと閉塞については既にお話しましたから、ここは素通りさせて頂きます。ただし、若干の補足説明をしますと、人間は^{けが}気枯れてくると、^{けが}気を何とか奪回しようとして、ケ(気)つけ儀礼をするようになります。生命エネルギーを何とか身に付けようとする努力が見られるようになります。新宗教がいろいろなイベントを工夫するのもそのためと言えます。阿含宗では「オーラの祭典」とか「星祭り」が有名ですが、創価学会の「世界平和文化祭」も、ケ(気)つけ儀礼に当たると思います。他方、閉塞との関連で言いますと、ツキつけ儀礼が重要になります。先ほどの大村英昭教授の調査結果によれば、「あなたは人生において成功するのに何が一番大切だと思いますか」という質問に対して、この時期の若者たちの多くは意外にもツキとかコネとかという短絡的な答えを出すということです。そして、こうした一般的な傾向を背景にして、ツキつけ儀礼を売る新宗教やセミナーが流行するようになります。

さて、第一次石油危機の直後に超能力ブームを起こしたユリゲラーのスプーン曲げのテレビ実演は、新宗教の

世界にも大きな影響を与えました。スプーン曲げ実演は日本全国に多くの超能力少年を輩出し、やがて広範な神秘呪術ブームを巻き起こしました。そして、それを追い風にして、いわゆる新新宗教が起こってくるというわけです。阿含宗とかGLAとか真光という新しい新宗教の台頭です。

(四) ポスト冷戦期の新宗教

第四期は、ポスト冷戦期に当たります。繁栄享受期の神秘呪術ブームは第四期になっても相変わらず続くのですが、そうした背景のもとに台頭してきた新宗教の特徴は少し変わってきます。ポスト冷戦期の新宗教を取り巻く環境を見ますと、バブル崩壊後は繁栄に陰りが出ると言うものの相変わらず豊かな社会が続きます。ただし、ベルリンの壁の崩壊以後は、国際的・国内的な政治状況が変化しました。冷戦の終結など世界状況が変化をしたのはご承知の通りですが、国内的にも五五年体制が崩れてきました。日本の政治家は右往左往しています。政府も右往左往しています。総じて、未来への不測性、不透

明性が増大しています。また、それを反映した不安と危機意識の入り交じった社会心理が日本の社会を覆うようになります。キリスト教の終末観は、観るという字の終末観なのですが、この時期の日本の終末観は感じるという字の終末観です。日本には欧米流の終末観はなく、あるのは何となく終末を感じる雰囲気としての終末観だけです。そして、これがこの段階の新新宗教に投影してきます。

第三期と第四期の新しい新宗教(新新宗教)の特徴の違いは、どのようなものでしょうか。第三期までの新新宗教は総じて個人主義的な超常体験だけが強調されましたが、第四期の新新宗教は必ずしもそうではありません。第四期の新新宗教も相変わらず超常体験を強調しますが、これに加えてある種の社会志向性が出てきます。それは、超常体験プラス終末主義・メシア主義ということです。第四期になりますと、これが極端に強調されてきます。ノストラダムスの大予言やハルマゲドンという言葉とともに終末が語られてきます。それから、大川隆法Ⅱブッダであるとか、麻原彰晃Ⅱキリストであるとかい

うような形で、教祖がメシアを気取るようにもなります。これは一種の独特の社会志向性と言えますが、しかし、教団によっては非常に屈折した社会志向性を表すようになります。

特にオウム真理教の場合には、閉鎖的な共同体に撤退して自分たちを社会から隔離したにもかかわらず、そこを基地にして再び社会に働きかけをします。しかも、その働きかけの内容が非常に屈折しています。社会のために貢献しようというのではなくて、無差別にサリンをまいてしまおうということです。非常に逆立ちした社会志向性であるわけです。しかし、幸福の科学やオウム真理教などの第二次新新宗教には一種の社会志向性があるということです。

以上のような戦後新宗教の過程を整理するとどうなりますでしょうか。中間を省略して最初の第一期と、最後の第四期を比べますと、現世利益から超常体験へ、あるいは呪術から神秘主義へ、と整理できると私は思います。第一期に活躍した新宗教信者の年齢層から言うと、その中心は中年層の人でした。とりわけ、中年の主婦が多か

ったのですが、最近の新新宗教で目立つのは若者たちです。若者たちだけをあまり誇張するのもよくないのですが、しかし最近の新宗教では若者たちが相対的に多いのです。ですから、最初と最後の時期の新宗教の主な担い手がちよつと違うということです。

それから、不思議な体験への志向性の特徴がやはり違います。例えば、第一期の新宗教の信者は不思議な体験の結果としての現世利益に興味をもちました。「のつびきならない悩みごと」の解決を求めて新宗教に入信したので、それから、信仰活動をしてみて問題が解決しなければ意味がないわけです。ところが、今では問題が解決するしないにかかわらず、不思議な体験自体の面白さとか、修行中の特定の意識状態そのものに意義を見出す傾向が強く見られるようになりました。頭の中が真っ白になるとか、何か変わったものが見えるとか、そうしたことに異常なほど興味をもつわけです。これは呪術と区別された神秘主義の特徴です。現世利益を求めるのは呪術ですが、神秘主義は現世利益を求めません。

四、実感宗教の時代

では、何故、人々は呪術よりも神秘主義を好むようになってきたのでしょうか。豊かな社会を達成して、「のつびきならない悩みごと」がなくなってきた、解決すべき深刻な問題が減少してきたと考えることもできます。あるいは、呪術と区別された不思議な体験それ自体を求める余裕が出てきたということなのかもしれません。いづれにせよ、こういうことを可能にしたのは、戦後日本の著しい経済発展であつたと私は思います。

それからもう一つの理由は、世の中が^{けが}枯れてきて、みずみずしさがなくなってきたということです。これは私が経験したことです。ネパールの山奥の子供たちの目は非常に輝いていました。カトマンズに出たら子供たちの目の輝きが半分くらいになっていました。東京に来たら子供たちの目の輝きはもっと少なくなっていました。経済的に豊かな社会になればなるほど子供たちの目の輝きが失われるのは、一体どうしてなのか。これは皮肉な現象です。一番いいのは、徹底的に豊かで徹底的に

目が輝いていることなのでしょうが、そうもいかないようです。経済発展に反比例して目が次第に輝きを失うわけです。これは生きるリアリティーとか、日常性のみずみずしさがなくなるということにもつながっていると思います。そして、これが最近の日本人の「感じたい症候群」を生み出しているのではないかと私は考えています。何かみずみずしさに触れたいと言いますか、それを得たいと言いますが、そうした求めが最近の日本で強くなっていると思いますが、私はそれを「感じたい症候群」と命名しています。

しかし、それは必ずしも日本だけに限らない現象ではないのではないかと私は思います。つまり、近代化を達成した先進資本主義諸国、とりわけアメリカなどにも共通の、ポストモダン的な傾向なのではなからうかと私は思うわけです。理性万能、合理主義万能、そうした近代の負の側面が目立ち始めてきて、人々が再び感性的なものを重視し出したということではないでしょうか。生きるリアリティーを感じたいのに感じるができないという問題、これはポストモダン的な一つの大きな課題で

あろうと思います。ですから、そういうものが背景にあつて神秘主義と言いますか、超常体験がはやるようになってきた、あるいは「感じる宗教」としての新新宗教を求めるようになってきたと私は思います。本来、宗教は、教説と体験、教相と観心というものが車の両輪をなしているものだと思います。

別の言い方をすれば、宗教には四つの大切な要素があると私は思います。一つは神秘性です。これは大切な要素で、私たちは神秘性を馬鹿にしてはいけなと思います。しかし、神秘性だけではオカルトになってしまいます。次に哲学性です。しかし、哲学性だけを強調すると理論倒れになってしまいます。第三に倫理性です。しかし、倫理性だけを強調すると、ただの道徳団体になってしまいます。それから第四に社会性です。しかし、社会性だけを強調すると、ただの福祉団体やNGOの団体になってしまいます。ですから、これらをワンセットでバランスよくたもつということが宗教にとって大切なのではないかと思うのです。

それが、最近の新宗教においては、どうも偏っている

ようです。特に教説と体験の対比で言いますと、体験重視の方にずっと傾いています。体を使って感覚で直接感じる修行中心の体験型の宗教が流行ってきています。このことは欧米の宗教社会学者によって、宗教の主観化とか、宗教の心理主義化と言われています。

そして、そうした傾向は、ピーター・バーガーによりますと、「見透しの効く範囲の将来に逆転する可能性のまずない広範囲な傾向」だと言っています。今後、宗教はますます主観化し、心理主義化するだろうと言っています。私個人としては、宗教には四つのバランスが大切だと思っているわけです。とは言いましても、バーガーは宗教の主観化、「感じる宗教」化というのが、これから逆転する可能性のまずない広範囲な傾向だということなのです。例えば、欧米キリスト教の世界では、かなり以前から異言を伴う聖霊体験を重視する体験主義的・心理主義的な聖霊カリスマ運動が超教派的にはやっています。日本でも、かなり以前から、カトリックの初台教会を中心に始まりました。聖霊を受けて、普通の人には訳のわからない異言を語ったり、その意味解きをするわけ

です。

一方、プロテスタント教会の中では、純福音系の教会が、やはり聖霊を強調して病氣直しをしています。最近では、こうした直接体験の宗教がはやるのです。説教壇の上から、ヨハネによる福音書の第何章何節にいわくとか、法華経の如来寿量品第十六にいわくなどという間接的なメッセージ宗教ははやらないのです。そうではなくて、直接体験が可能な宗教、ストレートに自分で感じる宗教がはやるのです。ヒンズー教系やチベット仏教系の新宗教がはやるということも、同じような原因によるものだと私は思います。

もともと東洋系の宗教やメジテーションにはそうした要素がふくよかにあつたはずで

『ターニング・トゥ・イースト』(Turning to East)というハーバー・コックスの本の中に、東洋宗教に改宗した現代アメリカ青年の述懐が紹介されています。その述懐は、キリスト教が形骸化して、リアリティが感じられなくなっていることをよく表しています。それは「教会で教わったことといえば、(中略)説教や訓戒ば

かりだ。言葉、言葉、言葉、それだけさ。みんなここだけの話なんだ(と頭を指す)。何も感じなかったんだ。何もかもが抽象的、間接的でいつもほかの人のことなんだ。(中略)だけど、ここ(東洋宗教)では自分で感じる事ができる。体で分かるんだ。(中略)じかにくるんだよ。どうしようもない力だね」というものです。これは、完全に「感じたい症候群」を患っているアメリカの若者の表現です。

これと同じような若者が日本にもいるわけです。例えば、坂本弁護士殺害事件の実行犯の一人として逮捕されたオウム真理教の中川智正被告などがそうです。彼は、まだ京都府立医大の学生だった一九八八年一月に京都の道場にひやかし半分で行ったそうです。そして、勧められるままに瞑想してみると、「実際にすごい光が体を通り抜け、辺りが真っ白になるような神秘体験をした」と言うのです。これは、恐らく調息によるものでしょうが、オウム真理教にはこうしたノウハウがあったということでしょう。とにかく、中川被告は、その体験に参ってしまつて入会してしまうわけです。冷かし半分に行つても

参ってしまつたということなのです。

一九九五年の十一月十二日に沖縄国際大学で行われた日本宗教学会の第五十四回学術大会の報告の中に、オウム真理教の修行体験についての報告がありました。この報告者はいまだにオウム真理教の信者なのですが、この人が実際に上九一色村のサティアンに行つてどんな修行をしたかというところ、ワイングラスに入つた液体を飲んだということでした。そのような薬物を使ってまでオウム真理教では神秘体験をさせようとするし、また、そうしたものに魅かれてオウム真理教に入る人が今日では多いわけです。先ほどの報告者は上九一色村から帰つてきてから道場に行き、今度は薬なしで中川被告と同じような体験をしたと言っていました。薬を用いるのはよくありませんが、オウム真理教には普通の修行だけでもいろいろな神秘体験ができるようなノウハウがあるのです。若者たちはそうしたものに魅かれるわけです。オウム真理教では、現在でも入会希望者や新入会者のための神秘体験セミナーを企画し、一定の参加者を得ているようです。

いて逆転の可能性のない一方向的な傾向だと言っていますが、それと正反対に、宗教の社会性が強まってくるということなのでしょう。第二次の一新新宗教の特徴は、社会性の強い宗教の新たな出番を用意するものなのではないか。社会性の強い宗教には、日蓮系の宗教が多いのですが、そうした宗教の出番が待たれているのかどうか、まだよく分かりませんが、その徴候はあると言えるのかもしれません。それはさておきましても、アメリカや日本の最近の宗教事情は、気枯れた先進資本主義諸国の多くの人々が、宗教にじかに感じる要素を求めているということを表していると私は思います。

近代以降、世俗化、あるいは非聖化、あるいは社会と人間からの意味抜きが進み、その結果、社会や人間が気枯れてきていることは否定できないでしょう。また、宗教自体が合理化したために感じる要素が失われてきていることも、社会や人間の気枯れを促していると私は思います。

日本の事例で言いますと、大手どこの新宗教が既成化して、旧新宗教化したということも、感じたい症候群

五、実感宗教の意義と限界

「感じたい症候群」が背景にあつて、「感じる宗教」がでてくるのですから、無理がないと言えは無理がないのですが、しかし、「感じる宗教」には欠点があります。どのような欠点かと言いますと、社会性が欠如しているという欠点です。もともと、心理主義的な宗教ですから、性格が甚だしく個人主義的なのです。あるいは、著しく私事化した宗教なのです。しかし、社会性がないのは、先ほどの宗教の四要素のバランスの観点からみて、やはり問題であると私は思います。

もつとも、第二次の一新新宗教、幸福の科学やオウム真理教などには一種独特の社会性はあるのです。ですから世の終わりを説くのです。そして、世の終わりを切り抜けるにはメシアとしての大川隆法や麻原彰晃が必要であるということを言うのです。これは、やはり、一種の社会性であると私は思います。

さて、それでは、これは一体何を意味しているのでしょうか。ピーター・バーガーは宗教の主観化の傾向につ

を患っている現代人の宗教的ニーズに宗教が応えられなくなっている一つの要因でしょう。大規模化した新宗教は神秘、奇跡、呪術からの脱却をはかったわけですが、これは宗教の豊満さ、ふくよかさの自己放棄であると私は思います。そうしますと、今日の宗教は、感じたいという願望にどのように応えたらいいかという問題に直面しているのではないかと思います。現代の宗教が必ずしも極端に合理化されているとは思いませんが、少なくとも豊満さを失つてきていると私は思います。これからの宗教は、これを奪回する必要があるのではないかと私は思っています。宗教には確かに言葉で教えるを説くという重要な側面があります。これは宗教の認知的要素ですが、しかし、宗教には認知的要素以外にも重要な要素、例えば感情的な要素、体験的要素などもあります。そして、今日ではこれが非常に重要になってきていると私は思います。ですから、私は宗教には修行や儀礼というものが必要です。大切であり、その再評価が必要であると思います。

創価学会は法華系の教団ですから、日本の宗教伝統から言うところのP的な要素が強いと言えます。教義の上から、

謗法行為は駄目であるという伝統が強いのです。それはそれでいいのではないかと思うのですが、同時に修行的、儀礼的な要素も大切にしたい方がいいのかなという感じもします。私は、宗教における「感じる」という要素を重視したいと思っています。法華系の教団には題目修行がありますから、感じる要素がないとは言えません。

結局、現代人はそれなりに真剣なのです。彼らの一部はオウムに縁があったり、幸福の科学に縁があったりするのですが、彼らの一人ひとりはかなり真面目なのです。彼らは一体何を求めているのでしょうか。要するに、現代人は、不思議な体験を通して、宗教的な真理とある種の出会い、これをカミ体験と言ってもいいのですが、彼らはカミと出会いたがっているのではないか、そんな感じがするわけです。

終わりに

ただ、不思議体験は、何かおどろおどろしい、極端な超常体験だけを言うのではないと私は思います。そうしたもののだけにとらわれていたならば、不思議体験が偏頗

になってしまいます。そうでなく、むしろ我々を取り巻く極めて日常的な事象、あるいは我々が生きていることそのこと自体が不思議なのであって、日常の些細なことがみんな不思議に輝いて見えるようになること自体が、本当の神秘体験でなろうかと、私は思うのです。宗教への入口として、何か特別な不思議なことにぶつかる、出くわすということはいいかもしれませんが、それだけに最後までこだわって、日常生活の中での些細な出来事です。すらすべて不思議な現象であるということに気付かないとするならば、それは、その人の宗教性が低いのではないかと、私はそう思うのです。

換言すれば、私たちの日常の生命の営みが本当の意味で生き生きとしていれば、躍動できていれば、わざわざ非日常的で極端な神秘体験に魅力を感じるということもなくなるのではないのでしょうか。私たちの日常生活自体をまず躍動せしめるような宗教であるということ、それが言葉の真の意味での「実感宗教」ではないかという感じがするわけです。大切なことは、今の時代があまり合理主義的なもの、論理的なものだけを求め、ロゴス化が

行き過ぎると、社会や人間が気枯^けれてくる。するとやはり潤いを求めて振り子は逆に振れる、ということではないでしょうか。そして、感情的な要素とか非合理的な要素がかなり極端な形で強調されるようになってくるのではなからうかと私は思います。

ですから、宗教が真に「実感宗教」であるという場合には、少なくとも人々がそこで生き生きとしているということが非常に大切なのではないかと私は思います。生き生きとした人々の姿が発見できる時に、そこに本当の意味での「実感宗教」があると考える次第です。

(にしましげる・東洋大学教授)

(本稿は一九九五年十一月二十日に行われた当研究所主催の公開講演会における講演内容に加筆していただいたものです)